

科目分類	専門科目群-専門導入科目			対象学年	1
授業科目	北東アジア超域研究総論			学期	春学期
担当教員	福原 裕二			選択/必修	必修（北東アジア専攻）
科目コード	H902101	授業形態	講義	単位数	2.0
授業の概要・到達目標	<p>この講義では、一国一地域に収まらない問題群を扱う「超域研究」を論じる。北東アジア研究科が考える「超域研究」とは、“何らかの「域」をこえて運動する事象や主体の拡散と収斂”に着目し、人文・社会科学の諸方法をもって行う研究である。担当者は、①それぞれが行っている超域研究にもとづく講義、②その研究に密接に関係する「超域的研究」の紹介と分析、を行い、受講生に「超域研究」を各自の研究枠組を構想する場合の一選択肢として理解させることをめざす。</p>				
授業計画	<p>第1回 導入（全担当教員） この講義のねらい、講義進行、成績評価方法を説明する。</p> <p>第2～4回 福原裕二 【韓国・北朝鮮、予防外交と紛争、市民社会】 朝鮮半島をめぐる国際関係・紛争を事例的に検討するなかで、なぜ北東アジア研究に超域的視点が重要なのかを考えてみたい。ここで取り上げる国際関係・紛争とは、北朝鮮の核兵器開発問題と日本に関わる領土問題である。まずは国際政治における超域的現象、そのなかでの拡散と収斂について思考をめぐらせてみる。これを踏まえて、北朝鮮の核兵器開発に内在する問題の超域性、また日本をめぐる領土問題が秘める三重の超域性を明らかにしていく。最後に、問題の解決を多者安保体制、（海の）公共財化の観点から考察することで、北東アジア国際関係の構造と力学（現実主義の壁）を浮き彫りにする。</p> <p>第5～7回 中村圭 【中国&日本、経済発展と高度人材の国際流動、ダイバーシティ&インクルージョン、ジェンダー】 中国は、社会主義計画経済時代の一つの組織（単位）で一生安泰なはずの生涯をおくっていた社会から、改革開放後の十数年間というごく短期間で頻繁な職業流動が当然の社会へと移行、同時に未曾有の経済発展を遂げている。本講義は、第4回で高度人材の職業流動とそれらを受容しながら経済成長した中国社会および経営組織のしくみについて、ミクロ・メゾ・マクロの各レベルで解き明かす。一方で、人材の流動化は有能な人材の登用とダイバーシティの促進につながるはずなのだが、なぜ日本社会ではあまりうまくいかないのか。第5回では、女性労働の参入パターンとライフコースにより、ジェンダーの視点から日本と中国社会を比較分析し、日本社会のダイバーシティ&インクルージョンを考察する。</p> <p>第8～10回 豊田知世 【資源エネルギー、経済発展と環境、地球環境問題、持続可能な開発】 経済発展の過程で発生する環境問題は、地域的な問題から国境を越えた地球規模の問題まで、さまざまな環境問題が発生している。本講義では、まず環境問題がなぜ発生するのか経済的な視点から説明する。そして、地域や地球規模の環境問題に対して、発展段階によってどのような特徴があり、またどのような環境政策が必要になるのか、いくつかの事例を挙げながら紹介する。地域や国境を越える環境問題、時間や世代を超えて影響が出る環境問題など、ジェンダーによる環境影響の違い、経済分野の政策が自然環境に与える影響など、さまざまな域を超える超域研究の視点から、環境問題について捉えられるようになることを目的としている。</p> <p>第11～13回 渡辺圭 【キーワード：、ロシア、キリスト教、越境布教】 ロシア語の記述文字は、修道士であるキュリロスとメトディオスの二人が、現在ロシアで用いられている「キリル文字」（厳密に言えば原型のグラゴール文字を発明）をスラヴ人に適用したことに端を発する。この「キリル文字」は、ビザンツの東方キリスト教の布教を目的として創出されたものであった。ロシア文化を学ぶ上では東方キリスト教の研究が不可欠である。日本にロシア正教を布教したのは、大主教ニコライ・カサートキン（1836-1912）であるが、彼は聖書を日本語に訳出するという偉業をなしている。ニコライ・カサートキンの訳業では、漢語が立脚点となっているが、注目すべきは、彼の東方キリスト教の日本に対する布教において多国間の文化の相互の影響が顕著だということである。 本講義では、キリスト教そのものが「言葉の宗教」である、という前提から出発し、その布教のための「越境」、「言語の多用」の問題を中心として授業を行う。プラトンのイデア論では、イデアを血肉したものが現実存在であるとされているが、本講義はこのプラトニズムに立脚して論を進める。</p> <p>第14回 総括：北東アジア超域研究の展望（全担当教員）</p>				

	<p>講義で示された問題群を超域的に研究した結果、見えてくるものは何か。それは、“何らかの「域」をこえて運動する事象や主体の拡散と収斂”の中に存在する人間とその営為の姿であろう。総括として、担当者全員が北東アジア超域研究を国家、そして、人間の存在そのものを問い直す学問として定置しようとする試みをめぐって議論を展開する。</p> <p>第15回 ディスカッション（全担当教員） 講義を通じて体得した「超域研究」を受講生はどのようにとらえ、どう向き合うかを述べ、それをめぐって全員がディスカッションする。</p>
テキスト	特定のテキストは使用しない。
参考文献	<p>各担当教員は以下を参考文献として使用する。</p> <p>（福原） >池内敏『竹島—もうひとつの日韓関係史』中公新書、2016年。 >福原裕二『北東アジアと朝鮮半島研究』国際書院、2015年。 >ドン・オーバード-ファー、ロバート・カーリン著、菱木一美訳『二つのコリア：国際政治の中の朝鮮半島』共同通信社、2015年。 >木宮正史編『朝鮮半島と東アジア』岩波書店、2015年。 >琉球新報・山陰中央新報『環りの海 竹島と尖閣 国境地域からの問い』岩波書店、2015年。 >本田良一『日口現場史 北方領土—終わらない戦後』北海道新聞社、2013年。 >三村光弘『現代朝鮮経済：挫折と再生への歩み』日本評論社、2017年。 >濱田武士・佐々木貴文『漁業と国境』みすず書房、2020年。</p> <p>（中村） >中村圭『なぜ中国企業は人材の流出をプラスに変えられるのか』勁草書房、2019年。 >瀬地山角編著『ジェンダーとセクシュアリティからみる東アジア』勁草書房、2017年。 >瀬地山角『東アジアの家父長制』勁草書房、1996年。 >西原和久『トランスナショナリズムと社会のイノベーション—越境する国際社会学とコスモポリタンの志向—』東信堂、2016年。 >坂部晶子『中国の家族とジェンダー—社会主義的近代化から転形期における女性のライフコース』明石書店、2021年。</p> <p>（豊田） >バリー・C・フィールド『環境経済学入門』日本評論社、2002年。 >ジョン・ディクソン他『環境はいくらか 環境の経済評価入門』築地書館、1991年。 >D・H・メドウズ他『成長の限界：ローマクラブ「人類の危機」レポート』ダイヤモンド社、1972年。 >マイケル・P・トダロ他著『トダロとスミスの開発経済学（原著第10版）』、ピアソン桐原、2010年。</p> <p>（渡辺） >バーウェル・エフドキーモフ著、古谷功訳『ロシア思想おけるキリスト』あかし書房、1983年。 >セルゲイ・ボルシャコフ著、古谷功訳『ロシアの神秘家たち』あかし書房、1985年。 >大木昭男『現代ロシアの文学と社会 「停滞の時代」からソ連邦崩壊前後まで』中央大学出版部、1993年。 >A.ローテル・斎田靖子訳『無名の順礼者 あるロシア人順礼者の手記』エンデレル書店、1998年。 >御子柴道夫『ロシア宗教思想史』成文社、2003年。 >御子柴道夫『ウラジーミル・ソロヴィヨフ 幻視者・詩人・哲学者』岩波書店、2011年。</p>
評価方法	<p>授業に臨む姿勢や態度、授業やディスカッション参加への積極性、全講義終了後に提出を求める「超域研究による自分の研究テーマの展開」についてのレポート（4,000字～8,000字）の内容によって評価する。</p> <p><成績評価方法に関して> 以下の基準で採点し、各点を平均して成績を評価する。</p> <p>①授業に臨む姿勢や態度について…欠席をしないこと。とくに第15回目の講義を欠席した者（全講義を通じて学んだことを確認できないため）、各講師が担当する4回の講義のうち2回以上欠席した者（当該講師の講義内容を半分以上理解していないと考えられるため）、は評価の対象としない。全回出席し、授業に臨む姿勢や態度が芳しい者には平常点100点を与え、1回欠席するごとに20点を減じる。平常点が59点以下の者（全15回の講義を通じて3回以上欠席した者）は評価の対象としない。</p>

	<p>②授業やディスカッション参加への積極性について...講義には積極的かつ真剣な態度で臨むこと。とくに第15回目のディスカッションの姿勢は評価の対象となる。各自10分程度のプレゼンテーションで、「超域研究」をどのように理解したか、「超域研究」はどのように各自の研究に生かせると考えているかを述べること。「超域研究」の考え方を自分の研究に生かせない場合にはその理由を述べること。ここでレジュメ作成は求めないが、各自メモを作成してることが望ましい。要件を満たしたプレゼンテーションをおこなった場合には80点を与える。全員のプレゼンテーション終了後には受講生中心にディスカッションをおこなう。とくに、各自の「超域研究」に対する理解と研究への応用についての考え方を踏まえて、他の受講生のプレゼンテーション内容と担当講師の考え方に対する批評を歓迎する。ディスカッションにおける積極性に対して最高で20点の評価点を加点する。</p> <p>③レポート提出について...全講義終了後、1週間以内に提出を求める。「超域研究による自分の研究テーマの展開」（4,000～8,000字）の内容を100点満点で評価する。期限までに提出しない者は評価の対象としない。</p>
参考URL	
その他	<p>本講義は、シラバス作成時点では「対面授業」を想定して記載しています。やむを得ない事情により「遠隔授業」となる場合には、シラバスの内容が一部変更になることがあります。その際には追って案内を行いますので、担当教員の指示に従ってください。</p>

科目分類	専門科目群-専門導入科目			対象学年	1
授業科目	開発政策総論			学期	春学期
担当教員	鈴木 遵也			選択/必修	必修（地域開発政策専攻）
科目コード	H902102	授業形態	講義	単位数	2.0
授業の概要・到達目標	<p>わが国でもEBPM（Evidence Based Policy Making）、すなわち科学的根拠に基づく政策形成の重要性が叫ばれて久しい。今や政策を考えるうえで、データを用いて科学的な検証を行いながら課題を発見し、対策を講じることは当たり前になりつつある。そこで、当科目の前半授業では、まずデータに基づく課題の発見や政策形成の考え方を学習し、ノートパソコンを使った実習を行いながら、EBPMの理解を深める。（以上、鈴木）</p> <p>この授業の後半では、地域とその変化の中での理論的視点である市民社会論を総合的に学ぶことを通じて、現代の地域づくり、政策の過程に関する意義と課題を分析するための枠組みを習得することを狙いとする。授業では、指定されたテキストや参考文献に即して、教員からのレクチャーと受講生とのディスカッションを行う。格差社会の一方で、市民の政治参加、男女共同参画が重視されている現代において、地域における旧来のつながりの現代に生かせる点と課題、新しい政治参加・社会参加の方法の意義と限界に関する物の見方を学ぶことによって、前半で学んだ地域経済の土台づくりにつながる地域政治・地域社会への参加（参加の抑制）に関する視点を身につける（以上、角）</p>				
授業計画	<p>第1回 回帰分析を学ぶ 第2回 地域課題の決定要因分析 第3回 地域経済の将来予測 第4回 地域の産業構造を把握する 第5回 シフト・シェア分析 第6回 産業連関表を学ぶ 第7回 経済波及効果の計測 第8回 予備日 第9回 ガイダンス 第10回 市民社会論に関する政治思想(1) 第11回 市民社会論に関する政治思想(2) 第12回 労働・格差に関する政治思想(1) 第13回 労働・格差に関する政治思想(2) 第14回 ジェンダーと市民社会・民主主義(1) 第15回 ジェンダーと市民社会・民主主義(2)</p>				
テキスト	<p>【鈴木】 基本的に使用しない。受講生と相談しながら必要に応じて教科書を指定する。</p> <p>【角】 受講生の関心を見て決定する。</p>				
参考文献	<p>【鈴木】 林宜嗣・林亮輔編著（2021）『地域データ分析入門—すぐに役立つEBPM実践ガイドブック』日本評論社</p> <p>【角】 三浦まり（2023）『さらば、男性政治』岩波新書。 田村哲樹（2009）『政治理論とフェミニズムの間—国家・社会・家族—』昭和堂。 山本馨（2018）『地域福祉の社会理論—贈与論・認識論・規模論の統合的理解』新曜社。 宇野重規（2016）『政治哲学的考察』岩波書店。</p> <p>その他、授業にて適時紹介する。</p>				
評価方法	授業内で指示する課題に基づいて評価する。				
参考URL					
その他					